

AIと私たちのこれから

——世間では、将来AIが人間に取って代わり、あらゆる分野で人間を凌駕してしまつのではないかと危惧する人が多いように感じます。斎藤さんはどう思いますか？

確かに、AIが人間に取って代わってしまうのではないかと危惧している人も少なくはないでしょう。しかし、それはAIについて知らないということが大きな理由だと思います。AIについての知識を持たない人は、AIを感情や意思を持つている独立した存在として漠然と捉えるようになり、結果としてその存在を恐れてしまうのです。AIは、あくまでも人間が数式をプログラミングした機械に過ぎません。AIの仕組みを理解すれば、私達がそうである様に、決してAIを怖いものとは思わなくなるでしょう。技術の本質は人間の能力の拡張なので、AIの正しい活用は多くの人にメリットをもたらします。そして今後はAIを使いこなす人と、まったく使えない人との間に、享受できるメリットの差ができるということも間違いないでしょう。もちろんAIについて何も知らなくても生きていくことはできますが、少しでも理解しておけば、世界に対する見方が変わってくると思います。他の色々なツールだったり、便利な機器と同じようにです。そのためAIについて学び、理解しておくことは一層重要になってくるでしょう。

——世の中にある「AIと人間」という二項対立的な見方についてはどう思いますか。

AIと人間を二項対立的に語ることはナンセンスであると思っています。なぜならAIは人間の道具でしかないからです。結局のところ数式をコードで入力するのは人間で、AIはそれに基づいて行動しているだけなのです。その構造は将来も変わらないでしょう。そしてAIと人間は、決して相容れない関係にあるものではありません。最も望ましいのは、二つの共存ではないでしょうか。AIと人間を二項対立的に語るよりも、AIの道具としての可能性に注目し、有益に活用する方法を考えることが重要であると考えています。

——AIは多くの人に受け入れられていくと思いますか。

例えば今の時代、ほとんどの人にとって「自分が今インターネットを使っている」という実感は薄いでしょう。これは、インターネットの技術が我々にとって「当たり前」になったからです。同じように、今後AIの活用が「当たり前」になっていき、AIを使っているという実感はなくなってくると思います。そして技術の価値は、我々研究者とそれをを用いる皆さんとの間のやりとりの中で生まれます。まず我々が新たな技術の紹介をする。次に、我々がした提案に対して皆さんが「これはどうなんだろ？」と常に疑問を持ちながら、受け入れるか受け入れないかを決めていく。そうして皆さんにとって新たな技術が「当たり前」になったとき、その技術に価値が生まれるのです。



斎藤喜寛

EXDREAM 株式会社 代表取締役

1980年代後期より音楽制作（作曲）に従事。武蔵野音楽院にてパーカリー音大メソッドを学ぶ。2013年EXDREAM株式会社を立ち上げ、音楽とテクノロジーを融合した、未来の音楽の創造を目指す。音楽制作・販売、インターネット関連事業などを手掛ける一方で、音楽テクノロジー学校「canplay」を始めとした、音楽教育事業にも携わっている。